

## 記者会見通訳における逸脱行為の考察

—ラグビーワールドカップ2019日本大会試合終了後記者会見分析結果から—

### Analyses of Deviating Acts of a Simultaneous Japanese-English Interpreter in the Rugby World Cup 2019 Post-match Press Conferences

松見誌野

Shino MATSUMI

*The Rugby World Cup (RWC) which was held in Japan for the first time in Asia in 2019 revealed the importance of simultaneous English-Japanese interpreting services provided at both pre- and post-match press conferences. This paper aims to find out how English-Japanese simultaneous interpretation is practiced at post-match press conferences in the RWC. For this purpose, simultaneous renderings of the English speech into Japanese by an interpreter were analyzed and classified into 4 categories of deviating acts by the interpreter. As predicted, deviating acts occurred when the interpreter attempted to increase the clarity of the source message for Japanese media, who were main listeners of the simultaneous interpretation.*

#### 1. はじめに

2019年9月20日から11月2日までの約40日間、アジア初開催となるラグビーワールドカップ（RWC）が日本で開催された。プール戦上位2チームが準々決勝へ進出し、準決勝、決勝へと勝ち進むRWCにおいて、記者会見での通訳者の存在は不可欠である。

2019年RWC出場全20チームのうち、英語が母語または公用語であるチームはアイルランド、スコットランド、サモア、ニュージーランド、南アフリ

カ、ナミビア、カナダ、イングランド、トンガ、アメリカ、ウェールズ、オーストラリア、フィジーの13カ国だった。松見(2022)によると、RWC2019大会開催期間中、台風の影響で中止となった3試合<sup>1</sup>を除く全45試合計90回の試合終了後記者会見登壇者の一人である代表チームヘッドコーチの出生国で最も多いのがニュージーランドで、20名中7名だった。英語が第一言語または公用語である国出身のヘッドコーチは17名で全体の85%を占めるものの、その内訳はニュージーランド7名、ウェールズ3名、南アフリカ2名、オーストラリア2名、トンガ1名、スコットランド1名、アイルランド1名と様々な国々の英語話者である。

また、同じく記者会見登壇者である代表チームのキャプテンまたはゲームキャプテンについても、一括りに英語話者と言っても、様々な国の訛りを持つ英語話者である。このことから、イングランド発祥のラグビーというスポーツの世界では、とりわけ日英通訳者の確保が重要であると言える。

日本のラグビー通訳に関しては、専門的な通訳訓練の場がほとんどなく、RWCのような国際大会では、背景知識や専門知識の習得等事前準備については、プロの通訳者に任されている。松見(2022)によると、試合は全国各地の会場で開催されていたため、東京の国際放送センターからリモート同時通訳が提供され、2社により通訳者の手配及び派遣が行われた。

表1が示すように、X社がRWC2019試合終了後記者会見に派遣した通訳者の半数が、ラグビー通訳経験者であった。ラグビー通訳未経験者4名中3名は会議通訳者で、1名は放送通訳者だった。またラグビー未経験者4名中3名はラグビー以外のスポーツ通訳経験者だった。Y社からの回答からは、試合終了後記者会見を担当した通訳者のラグビーの通訳経験の有無は分からなかった。2社から派遣された通訳者の半数は会議通訳者で、RWC2019日本大会では多くの通訳者が必要であったことから、プロの通訳者でもラグビー通訳未経験者が担当する必要があったと考えられる。

本稿では、RWC2019大会期間中に開催された試合終了後記者会見の原発言及びラグビー通訳経験者である通訳者1名の通訳音声データ11試合分、計17会見を文字化し、記者会見の場における逸脱行為を考察することによって、

表1 RWC2019試合終了後記者会見 通訳者経歴一覧

## X社派遣の通訳者

	通訳経歴
通訳者A	日本ラグビーフットボール協会に所属またはトップリーグ <sup>2</sup> のチーム通訳経験者
通訳者B	日本ラグビーフットボール協会に所属またはトップリーグ <sup>2</sup> のチーム通訳経験者
通訳者C	日本ラグビーフットボール協会に所属またはトップリーグ <sup>2</sup> のチーム通訳経験者
通訳者D	会議通訳者、放送通訳者、ラグビー試合後会見を含むスポーツ通訳経験者
通訳者E	会議通訳者、放送通訳者
通訳者F	会議通訳者、社内通訳経験者、試合後会見を含むラグビー以外のスポーツ通訳経験者
通訳者G	会議通訳者、通訳科目講師歴あり、試合後会見を含むラグビー以外のスポーツ通訳経験者
通訳者H	放送通訳者、ラグビー以外のスポーツ通訳者

## Y社派遣の通訳者

	通訳スクール 受講歴	通訳経歴
通訳者I	有	社内通訳経験者、フリーランス通訳
通訳者J	有	国際会議・シンポジウム、医療、IT ファッション、芸術、広告、スポーツ関連

ラグビーというスポーツの国際大会記者会見における通訳行為を明らかにしていく。RWC2019記者会見の通訳における逸脱行為を分析する理由としては、通訳における逸脱行為を分析することで、どのように当該スポーツ記者会見において通訳行為が実践されているかを考察し、ラグビー通訳未経験者にとって有益な知見が得られると考えるからである。

## 2. スポーツ通訳

### 2.1 スポーツ通訳の定義

スポーツ通訳とは、スポーツ環境で使われる通訳で、練習、試合、遠征、ミーティング、記者会見等スポーツに関連する様々な場面で用いられる通訳

である。スポーツチームあるいは選手専属のスポーツ通訳者とオリンピックやRWCのような国際大会の記者会見等で活躍するスポーツ通訳者が存在し、両者は重複する場合もある。

スポーツチームあるいは選手専属のスポーツ通訳者の場合、練習、試合、遠征、ミーティング、記者会見、その他生活面での通訳が求められ、場面に応じて、逐次通訳、同時通訳、ウィスパー通訳を使い分ける。記者会見での通訳については、聞き手が当該スポーツの豊富な知識を有している記者であり、会議通訳<sup>3</sup>同様に必要とされる通訳技術のレベルは高い。生活面での通訳については、コミュニティ通訳<sup>4</sup>に近いと言えるだろう。

## 2.2 スポーツ通訳の先行研究

小松（2005）は通訳を形態で分類する中で、会議通訳、ビジネス通訳、コミュニティ通訳、放送通訳、法廷通訳、手話通訳の6つの形態を紹介しているが、スポーツ通訳については言及していない。板谷（2017）は日本の通訳学研究者がスポーツ通訳をとりあげてこなかった理由として、これまでスポーツ通訳は一通訳領域として広く認知されてこなかったこと、スポーツ研究者によるフィールドへの参入が困難である点を挙げている。選手のコンディションへの影響を考慮して、フィールドから研究協力の承諾が得にくいことが予想されるからである。

スポーツ通訳の認知度が低いことに加えて、研究材料として通訳音声データを入手することが非常に困難であることから、スポーツ通訳研究はこれまでほとんど行われてこなかった。

## 3. 通訳倫理規定

通訳という行為が一つの職業として確立されると、業務上遵守すべきことについての共通認識が必要となり、職責規約や倫理規定が作成されるが、日本には日本語・外国語間の通訳を対象とする公的な倫理規定は存在しない（水野2005）。一方ラグビー強豪国の一つで移民国家のオーストラリアでは、通訳・翻訳の必要性が高く、通訳者・翻訳者の認定制度や職能団体が確立され

ている。瀧本（2006）は、オーストラリアでは通訳者・翻訳者の認定を全国翻訳者通訳者認定機関（NAATI, National Accreditation Authority for Translators and Interpreters）が行い、認定を受けた通訳者・翻訳者は、職能団体であるオーストラリア翻訳者通訳者協会（The Australian Institute of Interpreters and Translators）の倫理規定に従うことになっていると述べている。日本には日本語・外国語間の通訳の公的倫理規定が未だ確立されていないため、本稿ではオーストラリア翻訳者通訳者協会の倫理規定から、通訳の正確性に関する規定を以下抜粋する（online “AUSIT Code of Ethics and Code of Conduct” AUSIT 倫理規定・行動規範より引用）。

Interpreters and translators use their best professional judgement in remaining faithful at all times to the meaning of texts and messages.

通訳者、翻訳者はプロとして最善の判断を行い、文章やメッセージの意味に対し、常に忠実性を保つ。

Explanation: Accuracy for the purpose of this Code means optimal and complete message transfer into the target language preserving the content and intent of the source message or text without omission or distortion.

説明：本規定の目的における正確性とは、起点言語のメッセージまたは原文の内容および意図を省略、歪曲せず、そのまま保持し、メッセージを最適かつ完全な形で目標言語に伝達することである。

#### 4. 通訳の逸脱行為に関する先行研究

オーストラリア翻訳者通訳者協会の倫理規定は通訳の正確性について、「本規定の目的における正確性とは、起点言語のメッセージまたは原文の内容および意図を省略、歪曲せず、そのまま保持し、メッセージを最適かつ完全な形で目標言語に伝達することである。」と定めている。しかしながら実際には多くの逸脱事例が報告されており、飯田（2012）はコミュニティ通訳では、しばしば忠実に通訳していくという従来通訳像から「逸脱」した行為

が行なわれていると述べている。

さらに飯田（2017）では、新生児訪問模擬通訳の会話分析から、対話通訳における逸脱行為を考察する中で、逸脱行為は通訳倫理からの逸脱ではあるが、対人援助コミュニケーションの目標を達成させるべく、その場に適した相互行為を遂行していくために引き起こされているものであると述べている。

新崎（2010: 11-22）は「原発言を忠実に訳し、何も足さず、引かず、変えないこと」という原則を「不変・不介入原則」と呼び、実際には多くの通訳者がこの原則から逸脱する行為を主体的に行っていることに触れ、通訳倫理からの通訳者の逸脱行為として、「非主体的な逸脱」と「主体的な逸脱」に分類し、「非主体的な逸脱」が主に通訳者の技術力不足や環境的な阻害に起因する逸脱であるのに対して、「主体的な逸脱」は通訳者の意思が働き逸脱行為が生じていると述べている。具体的には、情報の追加や情報の消去、情報の修正や原発言以外の自発的発言が挙げられ、主体的な逸脱行為は通訳の利用者の利益に貢献しようという動機から行われており、その結果は利用者や同僚から前向きに評価されていると述べている。

新崎（2010: 21）はまた、日本の先行研究に見られる「逸脱行為」の事例のほとんどは、通訳者自身が語るエピソードであり、実際の訳出の記録は乏しいことに触れ、主体的な「逸脱行為」のほとんどが成功事例であるのは、ベテラン通訳者が世間に公表してもかまわないと思う例が集まったからだろうと述べている。また、実際には記録されない多くの主体的「逸脱行為」が行われ、中には聞き手やクライアントの不評を買った事例も少なからずあると思われると述べた上で、結果の評価にかかわらず、通訳者による主体的な「逸脱行為」は、コミュニケーション当事者の利益に資する目的で行われていることから、コミュニケーションの仲介役としての能動的な役割を果たそうとすることが、「不変・不介入原則」から離れることと関係していると推察している。

飯田の分析対象は対話通訳で、新崎は話者が一方的に話をするモノログ通訳が対象である。通訳形態で分類すると、前者はコミュニティ通訳で後者

は会議通訳である。本稿では、分析対象がRWC2019大会期間中に開催された試合終了後記者会見通訳である点、さらに当該記者会見を担当した通訳者の半数が会議通訳者である点を踏まえ、新崎の逸脱行為の分類を参考に、試合終了後記者会見の通訳における逸脱行為を分析し、これまで研究されてこなかったラグビーというスポーツの国際大会記者会見における通訳行為を明らかにしていく。

## 5. RWC2019日本大会の通訳サービス

RWC2019組織委員会は大会での言語サービスについて、キャプテンズラン（試合前日練習／ブリーフィング）と試合終了後に同時通訳での言語サービスを提供すると大会開催前に報道関係者に公表した。提供する通訳言語については、試合前日ブリーフィングでは両チーム登壇者の使用言語及び日本語、試合終了後記者会見では両チーム登壇者の使用言語、日本語、英語とした。試合終了後記者会見は、両チームそれぞれ約15分間実施され、2名の通訳者が配置され、一問一答ごとに順番に同時通訳した。

登壇者はヘッドコーチとキャプテンまたはゲームキャプテンの各チームから2名がほとんどであるが、RWC2019試合終了後記者会見では、コーチも加わり3名が登壇する場合もあった（Appendix 1参照）。

## 6. 研究方法

RWC2019大会開催期間中、台風の影響で中止となった3試合<sup>1</sup>を除く全45試合計90回の試合終了後記者会見のうち、登壇者が英語話者で日英通訳者が介入した72回の会見の映像がYouTubeで一般に公開されている。当該記者会見の原発言については、YouTube自動字幕機能の正確さについても検証するため、自動字幕機能を使用し文字化した後、コンテキストから修正が必要であると筆者が判断した場合は修正を加え、句読点は筆者が記入した。

通訳音声データについては、RWC2019大会試合終了後記者会見通訳を担当されたラグビー通訳経験のある通訳者1名からご提供頂いた。個人情報保護の観点から、当該通訳者の詳しい経歴等は割愛し、便宜上通訳者1と呼ぶ。

通訳者1が同時通訳を担当した会見の中から11試合、計17会見の通訳音声文字を起こし、句読点は筆者が記入した。RWC2019試合終了後記者会見における同時通訳の聞き手は、海外メディアと日本メディアであるが、登壇者の一人であるヘッドコーチの85%は英語が第一言語または公用語の国出身である。従って、提供される同時通訳は、日英よりもはるかに英日の割合が多くなる。従って本稿では、分析に使用する音声データを英日通訳音声データに限定する。通訳者1名の通訳音声データ研究結果のみをもって、ラグビー記者会見通訳を一般化することはできないが、RWC2019大会試合終了後記者会見通訳における逸脱行為を考察することで、ラグビーというスポーツの国際大会記者会見における通訳行為を明らかにしていく。

## 7. 主体的な「逸脱行為」分析

新崎 (2010, 17-19) は通訳者による主体的な「逸脱行為」を、情報の追加、消去、修正、訳出以外の自発的な発言の4つに分類し、先行研究によって報告された事例を示した。ここでは新崎の分類を参考に、主体的な逸脱行為を、情報の追加、消去、訳出以外の自発的な発言の3つに分類する。さらに新崎の分類に該当しないと著者が判断した事例については、4つ目の分類項目として「聞き手を意識した訳語選択」を加え、RWC2019大会試合終了後記者会見通訳における主体的な「逸脱行為」の事例を4つに分類する。また、通訳者1に聞き取りを行い、当時の状況や意図などを確認し、考察を行う（試合日程はAppendix 2参照）。本項で取り上げる事例の記者会見登壇者氏名及び出生国については、表2に示す。

表2 RWC2019 試合終了後記者会見登壇者氏名及び出生国

試合NO.	試合終了後記者会見 登壇者出生国						
	RWC2019 チーム	監督氏名	出生国	キャプテン氏名	出生国	コーチ氏名	出生国
2	オーストラリア	Michael Cheika	Australia	Michael Hooper	Australia	Mario Ledesma	Argentina
4	ニュージーランド	Steve Hansen	New Zealand	Kieran Read	New Zealand	Ian Foster	New Zealand
12	アメリカ	Gary Gold	South Africa	Blaine Scully	U.S.A.		
14	日本	Jamie Joseph	New Zealand	Pieter Labuschagne	South Africa		
17	ウェールズ	Warren Gatland	New Zealand	Alun Wyn Jones	Wales		
41	イングランド	Eddie Jones	Australia	Owen Farrell	England	Scott Wisemantel	Australia

## (1) 情報の追加

## 事例 a.

試合 #41 の準々決勝イングランド対オーストラリア戦終了後、40対16で勝利したイングランドの記者会見で、記者から Eddie Jones 監督に対して、フライハーフを二人起用したことに関する質問があった。質問の一部抜粋は次の通りである。“...then after George Ford came in, you always had two fly-halves on the field...” 同時通訳では、「…そしてジョージフォードが入ってきて、フライハーフが2人、10番がいたってことなんですが…」と訳出され、原発言には無い背番号10番という情報が追加されていたことが分かる。

通訳者1に聞き取りを行ったところ、世界的には背番号10番のポジションを“fly-half”と呼ぶが、日本ではスタンドオフとも呼ばれるため、通訳者Aが記者会見の聞き手である日本人記者に分かりやすいように、原発言にはない背番号の情報を付け加えて訳出したことが確認された。

## 事例 b.

プールA、試合 #14 の日本対アイルランド戦終了後、19対12で勝利した日本の記者会見で記者から Jamie Joseph 監督に対して、日本はこの試合のために長期間準備してきたが、相手チームは準備不足だったと思うかを尋ねる質問があった。監督からの回答の後半部分を一部抜粋する。“...what we have witnessed tonight which is you know nearly 50,000 people, 40 of which wore red jerseys.” 同時通訳では、「私たちが今日見た光景というのは、約5万人のお客様の前で、えーそしてたくさんの方々がジャパンのジャージを着て下さいました。」と訳された。ラグビー日本代表のユニフォームは赤と白であることから、監督は“red jerseys”と発言し、たくさん日本代表のユニフォームを着た観戦者がいたことに触れた。通訳者1に聞き取りを行ったところ、赤いジャージと訳すよりも、「ジャパンのジャージ」と訳出するほうが伝わりやすいとの判断のもと、下線部ジャパンという情報を追加したことが確認された。

この事例では原発言にある red という色の情報は消去されていることか

ら、2つ目の情報の消去にも該当するとも言える。また、通訳者の自発的発言を含む複合的な訳出例とも判断できることから、3つ目の訳出以外の自発的発言として分類することも可能であるが、ユニフォームの色からどちらのチームについて言及しているかを特定した訳出となっていることから、情報の追加に分類した。

RWC2019試合終了後記者会見の聞き手は、海外メディアと日本のメディアであるが、登壇者の一人であるヘッドコーチの85%は英語が第一言語または公用語の国出身である。従って、提供される同時通訳は、日英よりもはるかに英日の割合が多くなる。英語から日本語へ訳出する際、通訳者1が聞き手である日本人記者の利益に資する目的で情報の追加を行っていることが確認されたことから、RWC2019試合終了後記者会見の通訳においては、ラグビー用語やルール以外にも、日本人記者が保有するラグビーに関する知識や用語を背景知識として持つことが重要であると言える。

## (2) 情報の消去

### 事例c.

プールD、試合#2のオーストラリア対フィジー戦終了後、39対21で勝利したオーストラリアの記者会見で記者から Michael Cheika 監督に対して、交代選手の起用に関する質問があり、監督が次のように回答した。“...I think you saw a guy let's say excuse me you did tell me about that before we got up here if you look at the guy like Haylett-Petty, he's been out of the team for a while in and out...” 同時通訳では、「で、今回に関しては例えばペティーですね、あのしばらくチームに入ってなかったんですね…」と訳出され、下線部の“excuse me you did tell me about that before we got up here”が消去されていることが分かる。

下線部発言は監督が隣に座っている Michael Hooper キャプテンに向けて発した発言で、会見映像で確認したところ、壇上で監督が机の下の何かに足をぶつけたような様子が確認できる。通訳者1に聞き取りを行ったところ、実際の通訳ブースのモニターでは、監督の足元が確認できなかったため、机の下の何かに足をぶつけたであろうことが推測できなかったことに加え、記者

からの質問の回答とは関係がないため、意図的に下線部の訳出が消去されたことが確認できた。

#### 事例 d.

プールD、試合#17のオーストラリア対ウェールズ戦終了後、25対29で勝利したウェールズの記者会見で記者から Alun Wyn Jones キャプテンに次のような質問があった。“Alun did you expect to celebrate the win and your record-breaking cap with a kiss from George North...” 通訳者は、「今日は勝ちでこういう形で勝利を飾ってお祝いできると思ってましたか。」と訳出し、下線部の“your record-breaking cap with a kiss from George North”の訳出が消去されていることが分かる。試合終了後、チームメイトの George North が Alun Wyn Jones キャプテンにキスをしたと推測されるが、通訳者1に聞き取りを行ったところ、実際の試合の様子を必ずしも会見前に見ることができるとは限らず、George North が Alun Wyn Jones キャプテンにキスをした場面についても映像で確認できなかったため、意図的に訳出が消去されたことが確認できた。

情報の消去に分類した事例 c. 及び d. からは、通訳者が実際に目にしていない場面に関する発言については、通訳者により意図的に消去されたことが確認された。憶測ではあるが、実際に目にしていない場面についての発言を通訳する場合、確実性が欠如するため訳出をためらうことに繋がるのかもしれない。同時通訳での躊躇いは時間のロスに繋がるため、下線部前半部分の your record-breaking cap を消去せざるを得ない状況になったと推測する。RWC2019 試合終了後記者会見の通訳においては、当日の試合は勿論であるが、試合前後の映像も通訳者が確認できる状況を確保することが重要であると言える。

### (3) 訳出以外の自発的発言

#### 事例 e.

プールB、試合#4のニュージーランド対南アフリカ戦終了後、23対13で勝利したニュージーランドの記者会見で記者から Steve Hansen 監督に対し

て、試合の鍵となったプレイについて質問があり、監督が次のように回答した。“...it’s a pretty big moment but that’s what rugby’s about isn’t it? Trying to win the moments that matter.” 下線部 “Trying to win the moments that matter.” は直訳では「重要な瞬間（局面）で勝つこと」となるが、同時通訳では「あの勝負どころであのタックルがきめられてそれでそこで勝負はきまったんだと思います。」と訳出された。通訳者1に聞き取りを行ったところ、回答冒頭部分で、Hansen監督が試合の鍵となった特定選手のタックルについて言及していることから、下線部 “Trying to win the moments that matter.” の “the moments” を意図的にタックルに限定して訳出されたことが確認できた。通訳者の自発的発言を含む複合的な訳出例と考えられる。

#### (4) 聞き手を意識した訳語選択

##### 事例 f.

プールD、試合#2のオーストラリア対フィジー戦終了後、39対21で勝利したオーストラリアの記者会見で記者からMichael Cheika監督に対し、交代選手の起用に関する質問があり、監督が次のように回答した。“...he came on for maybe only 10 or 15 minutes, but he wanted to make some he made some very good touches, a good high ball take, a beautiful pass to set up a try...” 同時通訳では、「…サモア戦で出て、それでまあ10分15分だったと思うんですが、あのまあペティーに関しては本当に良いハイボールをとったりだとか、それによってまあトライのお膳立てもしてくれました…」と訳出された。“set up” は（会社・委員会・施設などを）設立する、創設（開設）する、（症状・一連の事態などを）引き起こす、生じさせる、などを意味する<sup>5</sup>。下線部 “to set up a try” に対する訳語として「トライのお膳立てもしてくれました」が選択された。聞き手である日本人記者を意識した上で比喩的な概念の拡張から、通訳者1が訳語を選択した事例であると考ええる。

##### 事例 g.

プールC、試合#12のイングランド対アメリカ戦終了後、45対7で敗北し

たアメリカの記者会見で記者がGary Gold監督に対して、次の質問をした。“Gary you were you admitted that you’d be severe underdogs ahead of this encounter you’ve got to build this squad up again to face France...” 通訳者は「監督、ほんとにまあ負け犬、格下ということをおっしゃってましたが、次フランス戦です。」と訳した。“underdog”は(競争などに)負けた[負けそうな]方、敗者を意味する<sup>5</sup>。反対語として“top dog”が辞書には記載されているが、通訳者1は「負け犬」と訳出した直後に「格下」という単語に言い直している。事例f.同様に、聞き手である日本人記者を意識した上で比喩的な概念の拡張から、通訳者1が訳語を選択した事例であると考えられる。

#### 事例h.

プールA、試合#14の日本対アイルランド戦終了後、19対12で勝利した日本の記者会見で記者からJamie Joseph監督に対して、次のような質問があった。“...a question for Jamie, so before the tournament you set as a goal making it to the last eight. After today’s victory it seems like that is very very highly likely, are you gonna reassess your goal for this tournament? Where do you see your team going from here?” 記者の質問は次のように日本語に訳された。「ジェイミー監督、トーナメントの前に目標としてはトップエイトっていうことをおっしゃってました、ただ今日のこの勝利でトップエイトっていうのはかなり可能性が高くなったんですが、目標を変えるってことはお考えでしょうか。ここからどのように進もうと思いますか。」通訳者1に聞き取りを行ったところ、下線部“making it to the last eight”を「ラストエイト」というよりも「トップエイト」と訳したほうが聞き手である日本人記者に伝わりやすいと判断し、訳語が選択されたことが確認できた。

## 8. まとめ

RWC2019大会開催期間中、台風の影響で中止となった3試合<sup>1</sup>を除く全45試合計90回の試合終了後記者会見のうち、登壇者が英語話者で日英通訳者が介入した72回の会見映像が一般に公開されている。本稿では、そのうちの11

試合、計17会見の実際の通訳音声データを通訳者1名からご提供頂き、主体的な「逸脱行為」に注目して文字化した原発言と通訳音声と比較し、分析を行った。

新崎（2010, 17-19）の分類を参考に、主体的な逸脱行為を、情報の追加、消去、訳出以外の自発的な発言の3つに分類し、さらに新崎の分類に該当しないと著者が判断した事例については、4つ目の分類項目として「聞き手を意識した訳語選択」を加え、考察を行った。

情報の追加に分類した2つの事例からは、通訳者1が聞き手である日本人記者の利益に資する目的で情報の追加を行っていることが確認された。RWC2019試合終了後記者会見の聞き手は、海外メディアと日本のメディアであるが、登壇者の一人であるヘッドコーチの85%は英語が第一言語または公用語の国出身である。従って、提供される同時通訳は、日英よりもはるかに英日の割合が多くなる。英語から日本語へ訳出する際、通訳者1が聞き手である日本人記者の利益に資する目的で情報の追加を行うことから、RWC2019試合終了後記者会見の通訳においては、ラグビー用語やルール以外にも、日本人記者が保有するラグビーに関する知識や用語を背景知識として持つことが重要であると言える。

情報の消去に分類した2つの事例からは、通訳者1が実際に目にしていない場面に関する発言については、意図的に消去されたことが確認された。憶測ではあるが、実際に目にしていない場面についての発言を通訳する場合、確実性が欠如するため訳出をためらうことに繋がるのかもしれない。RWC2019試合終了後記者会見の通訳においては、当日の試合は勿論であるが、試合前後の映像も通訳者が確認できる状況を確保することが重要であると言える。

聞き手を意識した訳語選択に分類した3つの事例からは、聞き手である日本人記者に分かりやすい訳語を通訳者1が能動的に選択したことが確認された。

新崎（2010: 21）の指摘通り、日本の先行研究に見られる「逸脱行為」の事例のほとんどは、通訳者自身が語るエピソードであり、実際の訳出の記録は乏しい。さらにスポーツ通訳に関しては認知度が低いことに加えて、研究

材料として通訳音声データを入手することが極めて困難であることから、スポーツ通訳研究はこれまでほとんど行われてこなかった。通訳者1名の通訳音声データ研究結果のみをもって、ラグビー記者会見通訳を一般化することはできないが、どのように当該スポーツ記者会見における通訳行為が実践されているかを考察することで、ラグビー通訳未経験者にとって有益な知見が得られたと考える。

本稿で通訳者の主体的な「逸脱行為」は、聞き手である日本人記者の利益に資する目的で行われていることが確認されたことから、今後は聞き手である日本人記者の視点に立った通訳評価についても研究を進めていきたい。今後スポーツ通訳の認知度が高まり、スポーツ通訳研究が活発になることを期待したい。

## 謝辞

本稿はRWC2019試合終了後記者会見の同時通訳を担当された通訳者からの通訳音声データを分析し執筆した。データ提供者に心より謝意を表したい。

## 著者紹介

松見誌野 (MATSUMI Shino)

名古屋外国語大学言語教育開発センター外国語担当専任講師。

連絡先: matsumi@nufs.ac.jp

## 註

- 1 10月12日、13日にそれぞれ開催予定だったニュージーランド対イタリア戦、ナミビア対カナダ戦、10月12日開催予定だったイングランド対フランス戦は台風の影響で中止となった。
- 2 2003-2004シーズンに発足した日本の社会人ラグビーユニオンの全国リーグ。2022年には新リーグ「ジャパンラグビーリーグワン」が開幕した。
- 3 小松 (2005) は会議通訳を、国際会議、外交交渉、シンポジウム、セミナー、講演会などで使用される最も本格的な通訳で、必要とされる通訳技術のレベルも高いと説明している。
- 4 小松 (2005) は医療、福祉、教育などの公共サービス面で在日外国人のための通訳を経

して、コミュニティ通訳と呼んでいる。

<sup>5</sup> 研究社新英和大辞典第六版

## 引用文献

- 飯田奈美子 (2012) 「対人援助場面のコミュニティ通訳における「逸脱行為」の分析－事例報告分析を通して」『Core Ethics：コア・エシックス』第8号：27-39.
- 飯田奈美子 (2017) 「対話通訳における逸脱行為の考察－新生児訪問模擬通訳の会話分析から－」『通訳翻訳研究』第17号：1-22. 日本通訳翻訳学会.
- 板谷初子 (2017) 「スポーツ通訳者に求められる役割～プロ野球球団通訳者に対する M-GTA を採用した分析を通じて～」『通訳翻訳研究』第17号：23-43. 日本通訳翻訳学会.
- 小松達也 (2005) 『通訳の技術』研究社.
- 瀧本真人 (2006) 「AUSIT 倫理規定と通訳者の行動－ビジネス分野におけるダイアログ通訳の場合－」『通訳研究』6巻：143-154.
- 松見誌野 (2022) 「ラグビーにおける日英通訳者確保の重要性についての考察－ラグビーワールドカップ2019日本大会試合終了後記者会見分析結果から－」『アカデミア』文学・語学編第112号：179-195.
- 水野真木子 (2005) 「各種通訳倫理規定の内容と基本理念－会議, コミュニティ, 法廷, 医療通訳の倫理規定を比較して－」『通訳研究』5巻：157-172.
- 新崎隆子 (2010) 「通訳のコミュニケーション調整仮説－英日逐次通訳の事例から－」青山学院大学大学院国際政治経済学研究科国際コミュニケーション専攻2010年度博士論文.

## オンライン

“AUSIT Code of Ethics and Code of Conduct” AUSIT 倫理規定・行動規範

[https://ausit.org/wp-content/uploads/2020/02/Code\\_of\\_Ethics\\_Japanese-translation.pdf](https://ausit.org/wp-content/uploads/2020/02/Code_of_Ethics_Japanese-translation.pdf)

Appendix 1

RWC2019 試合終了後記者会見 登壇者出生国							
試合NO.	チーム	監督氏名	出生国	キャプテン氏名	出生国	コーチ氏名	出生国
1	日本	Jamie Joseph	New Zealand	Michael Leitch	New Zealand		
6	アイルランド	Josef Schmidt	New Zealand	Rory Best	Northern Ireland		
	スコットランド	Gregor Townsend	Scotland				
9	ロシア	Lyn Jones	Wales	Vasily Artemyev	Russia		
	サモア	Steve Jackson	New Zealand	Chris Vui	New Zealand		
14	日本	Jamie Joseph	New Zealand	Pieter Labuschagne	South Africa		
	アイルランド	Josef Schmidt	New Zealand	Rory Best	Northern Ireland		
	スコットランド	Gregor Townsend	Scotland	Stuart McNally	Scotland		
18	サモア	Vaaluaga Steve Jackson	New Zealand	Jack Lam	New Zealand		
22	アイルランド	Josef Schmidt	New Zealand	Johnny Sexton	Ireland		
	ロシア	Lyn Jones	Wales	Vasily Artemyev	Russia		
26	日本	Jamie Joseph	New Zealand	Pieter Labuschagne	South Africa		
	サモア	Steve Jackson	New Zealand	Jack Lam	New Zealand		
31	スコットランド	Gregor Townsend	Scotland	John Barclay	Hong Kong		
	ロシア	Lyn Jones	Wales	Vasily Artemyev	Russia		
36	アイルランド	Josef Schmidt	New Zealand	Rory Best	Ireland		
	サモア	Vaaluaga Steve Jackson	New Zealand	Jack Lam	New Zealand		
40	日本	Jamie Joseph	New Zealand	Michael Leitch	New Zealand		
	スコットランド	Gregor Townsend	Scotland	Greig Laidlaw	Scotland		
4	ニュージーランド	Steve Hansen	New Zealand	Kieran Read	New Zealand	Ian Foster	New Zealand
	南アフリカ	Rassie Erasmus	South Africa	Siya Kolisi	South Africa		
5	ナミビア	Phil Davies	Wales	Tjuike Uanivi	Namibia		
11	カナダ	Kingsley Jones	Wales	Tyler Adron	Canada		
15	南アフリカ	Rassie Erasmus	South Africa	Schaik Brits	South Africa		
	ナミビア	Phil Davies	Wales	Tjuike Uanivi	Namibia		
20	カナダ	Kingsley Jones	Wales	Tyler Adron	Canada		
23	南アフリカ	Rassie Erasmus	South Africa	Siya Kolisi	South Africa		
27	ニュージーランド	Steve Hansen	New Zealand	Sam Whitelock	New Zealand	Ian Foster	New Zealand
	ナミビア	Phil Davies	Wales	Johan Deyzel	Namibia		
	南アフリカ	Rassie Erasmus	South Africa	Siya Kolisi	South Africa		
29	カナダ	Kingsley Jones	Wales	Tyler Adron	Canada		
	イングランド	Eddie Jones	Australia	Owen Farrell	England	John Mitchell	New Zealand
7	トンガ	Toutai Kefu	Tonga	Siale Piutau	New Zealand		
	イングランド	Eddie Jones	Australia	George Ford	England	Steve Borthwick	England
12	アメリカ	Gary Gold	South Africa	Blaine Scully	U.S.A		
13	トンガ	Toutai Kefu	Tonga	Siale Piutau	New Zealand		
19	アメリカ	Gary Gold	South Africa	Blaine Scully	U.S.A		
25	イングランド	Eddie Jones	Australia	Owen Farrell	England	John Mitchell	New Zealand
28	トンガ	Toutai Kefu	Tonga	Siale Piutau	New Zealand		
30	アメリカ	Gary Gold	South Africa	Blaine Scully	U.S.A		
38	アメリカ	Gary Gold	South Africa	Blaine Scully	U.S.A		
	トンガ	Toutai Kefu	Tonga	Siale Piutau	New Zealand		
2	オーストラリア	Michael Cheika	Australia	Michael Hooper	Australia	Mario Ledesma	Argentina
	フィジー	John Mckee	New Zealand	Dominiko Waqaniburotu	Fiji		
8	ウェールズ	Warren Gatland	New Zealand	Alun Wyn Jones	Wales		
10	フィジー	John Mckee	New Zealand	Dominiko Waqaniburotu	Fiji		
16	ジョージア	Milton Haig	New Zealand	Jabba Bregvadze	Georgia		
17	オーストラリア	Michael Cheika	Australia	Michael Hooper	Australia		
	ウェールズ	Warren Gatland	New Zealand	Alun Wyn Jones	Wales		
21	ジョージア	Milton Haig	New Zealand	Merab Sharikadze	Russia		
	フィジー	John Mckee	New Zealand	Dominiko Waqaniburotu	Fiji		
24	オーストラリア	Michael Cheika	Australia	Michael Hooper	Australia		
32	ウェールズ	Warren Gatland	New Zealand	Alun Wyn Jones	Wales		
	フィジー	John Mckee	New Zealand	Dominiko Waqaniburotu	Fiji		
33	オーストラリア	Michael Cheika	Australia	David Pocock	Zimbabwe		
	ジョージア	Milton Haig	New Zealand	Merab Sharikadze	Russia		
39	ウェールズ	Warren Gatland	New Zealand	Justin Tipuric	Wales		
	イングランド	Eddie Jones	Australia	Owen Farrell	England	Scott Wisemantel	Australia
41	オーストラリア	Michael Cheika	Australia	Michael Hooper	Australia		
	ニュージーランド	Steve Hansen	New Zealand	Kieran Read	New Zealand	Ian Foster	New Zealand
42	アイルランド	Josef Schmidt	New Zealand	Rory Best	Ireland		
43	ウェールズ	Warren Gatland	New Zealand	Alun Wyn Jones	Wales		
44	日本	Jamie Joseph	New Zealand	Michael Leitch	New Zealand		
	南アフリカ	Rassie Erasmus	South Africa	Siya Kolisi	South Africa		
45	イングランド	Eddie Jones	Australia	Owen Farrell	England	Steve Borthwick	England
	ニュージーランド	Steve Hansen	New Zealand	Kieran Read	New Zealand	Ian Foster	New Zealand
	ウェールズ	Warren Gatland	New Zealand	Alun Wyn Jones	Wales		
46	南アフリカ	Rassie Erasmus	South Africa	Siya Kolisi	South Africa		
	ニュージーランド	Steve Hansen	New Zealand	Kieran Read	New Zealand	Ian Foster	New Zealand
47	ウェールズ	Warren Gatland	New Zealand	Alun Wyn Jones	Wales		
	イングランド	Eddie Jones	Australia	Owen Farrell	England	Steve Borthwick	England
48	南アフリカ	Rassie Erasmus	South Africa	Siya Kolisi	South Africa		

## Appendix 2

	試合NO.	日程	試合	会場
プ リ ル A	1	9月20日	日本 v ロシア	東京スタジアム
	6	9月22日	アイルランド v スコットランド	横浜国際総合競技場
	9	9月24日	ロシア v サモア	熊谷ラグビー場
	14	9月28日	日本 v アイルランド	小笠山総合運動公園エコパスタジアム
	18	9月30日	スコットランド v サモア	神戸市御崎公園球技場
	22	10月3日	アイルランド v ロシア	神戸市御崎公園球技場
	26	10月5日	日本 v サモア	豊田スタジアム
	31	10月9日	スコットランド v ロシア	小笠山総合運動公園エコパスタジアム
	36	10月12日	アイルランド v サモア	東平尾公園博多の森球技場
	40	10月13日	日本 v スコットランド	横浜国際総合競技場
プ リ ル B	4	9月21日	ニュージーランド v 南アフリカ	横浜国際総合競技場
	5	9月22日	イタリア v ナミビア	東大阪市花園ラグビー場
	11	9月26日	イタリア v カナダ	東平尾公園博多の森球技場
	15	9月28日	南アフリカ v ナミビア	豊田スタジアム
	20	10月2日	ニュージーランド v カナダ	大分スポーツ公園総合競技場
	23	10月4日	南アフリカ v イタリア	小笠山総合運動公園エコパスタジアム
	27	10月6日	ニュージーランド v ナミビア	東京スタジアム
	29	10月8日	南アフリカ v カナダ	神戸市御崎公園球技場
プ リ ル C	34	10月12日	ニュージーランド v イタリア	豊田スタジアム
	37	10月13日	ナミビア v カナダ	釜石鶴住居復興スタジアム
	3	9月21日	フランス v アルゼンチン	東京スタジアム
	7	9月22日	イングランド v トンガ	札幌ドーム
	12	9月26日	イングランド v アメリカ	神戸市御崎公園球技場
	13	9月28日	アルゼンチン v トンガ	東大阪市花園ラグビー場
	19	10月2日	フランス v アメリカ	東平尾公園博多の森球技場
	25	10月5日	イングランド v アルゼンチン	東京スタジアム
	28	10月6日	フランス v トンガ	熊本県民総合運動公園陸上競技場
	30	10月9日	アルゼンチン v アメリカ	熊谷ラグビー場
プ リ ル D	35	10月12日	イングランド v フランス	横浜国際総合競技場
	38	10月13日	アメリカ v トンガ	東大阪市花園ラグビー場
	2	9月21日	オーストラリア v フィジー	札幌ドーム
	8	9月23日	ウェールズ v ジョージア	豊田スタジアム
	10	9月25日	フィジー v ウルグアイ	釜石鶴住居復興スタジアム
	16	9月29日	ジョージア v ウルグアイ	熊谷ラグビー場
	17	9月29日	オーストラリア v ウェールズ	東京スタジアム
	21	10月3日	ジョージア v フィジー	東大阪市花園ラグビー場
決 勝 ト ナ メ ン ト	24	10月5日	オーストラリア v ウルグアイ	大分スポーツ公園総合競技場
	32	10月9日	ウェールズ v フィジー	大分スポーツ公園総合競技場
	33	10月11日	オーストラリア v ジョージア	小笠山総合運動公園エコパスタジアム
	39	10月13日	ウェールズ v ウルグアイ	熊本県民総合運動公園陸上競技場
	41	10月19日	準々決勝1: イングランド v オーストラリア	大分スポーツ公園総合競技場
	42	10月19日	準々決勝2: ニュージーランド v アイルランド	東京スタジアム
	43	10月20日	準々決勝3: ウェールズ v フランス	大分スポーツ公園総合競技場
ナ メ ン ト	44	10月20日	準々決勝4: 日本 v 南アフリカ	東京スタジアム
	45	10月26日	準決勝1: イングランド v ニュージーランド	横浜国際総合競技場
	46	10月27日	準決勝2: ウェールズ v 南アフリカ	横浜国際総合競技場
	47	11月1日	3位決定戦: ニュージーランド v ウェールズ	東京スタジアム
	48	11月2日	決勝: イングランド v 南アフリカ	横浜国際総合競技場